

第3部

関係機関・保護者との 連携を進めるために



特別支援教育の進展の中で見えてきたこと～精神科医の立場から～

京都府立心身障害者福祉センター附属リハビリテーション病院

精神科・神経内科医 有賀 やよい

<はじめに>

特殊教育から特別支援教育への大きなうねりの中で、医療・保健・福祉などの分野と、教育との連携が画期的に進み、私自身も平成13年度から始まったLD支援事業以降、本年度の特別支援教育推進事業にいたるまで、「京都府専門家チーム」の一員として活動してきた。さらに、15年度から養護学校のセンター機能の強化をめざして始まった養護学校・地域等連携推進事業の中でも、地域の小・中学校へ巡回教育相談に伺う機会をたくさんいただいた。この5年間子どもたちや先生方との出会いを通して学んだ軽度発達障害についての経験を私なりにまとめてみたいと思う。またこの誌面を通して、直接お会いできなかった府内のすべての先生方とも特別支援教育の成果を共有できれば幸いである。

<中枢神経系の機能不全とは>

精神医療での診断はICD-10やDSM-IVの操作的診断に基づいてなされているが、教育分野では、平成16年1月に文部科学省がガイドライン(試案)の中で、定義や判断基準、観点、指導方法を提唱した。この中で、学習障害(以下LDと略す)、注意欠陥/多動性障害(以下ADHDと略す)、高機能自閉症等(以下PDD‘広汎性発達障害’と略す)の3つの障害について、共通して「中枢神経系に何らかの要因による機能不全がある」と記載されている。効果的な支援や合理的に薬を使うには、脳機能の理解が不可欠と思われるので、このことを少し具体的に説明したい。

①脳機能分化の過程で起きる発達のアンバランス

知能や学習と最も関係の深い人間の脳皮質には左右の半球があり、それぞれが前頭葉・側頭葉・頭頂葉・後頭葉に分かれ、それぞれ異なった機能を有している。脳は、胎児期初期から神経細胞の分裂と機能分化が始まり、神経細胞間の連絡が複雑かつシステミックに完成するのが20歳前後であるが、その間の発達時期に、ある部位に何らかの障害が加わったり、それぞれの部位の発達速度が異なったりすると、機能不全や発達のアンバランスが生じる。この組み合わせの違いや程度の違いによって、得意なことと苦手なことなど、脳の個性の基本が決まってくる。

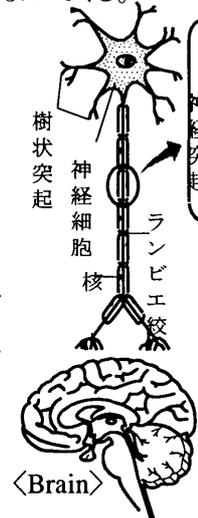
②脳を構成する神経細胞の電気的活動の違い

神経細胞が休止状態から活動状態に入るための最小の刺激の強さを刺激閾値といい、これが通常より低いと刺激に対する反応が過剰になり、閾値が高いと鈍くなる。

脳全体で見ると、閾値の低い細胞を多く持つ脳は興奮しやすくなる。

③神経伝達物質の量や代謝の違い

シナプスという神経細胞と神経細胞との接合部位では、前の細胞が化学物質である神経伝達物質を放出し後の細胞に情報を伝える。量が多すぎたり代謝が遅いと神経経路は強く長く働き、量が少なかったり代謝が速いと、神経経路の働きは弱くすぐに停止する。脳のどの部位か、どの神経伝達物質かの違いが、脳の個性をかたちづくる。



④認知(情報処理)過程の機能不全

私たち生物が、外界から目や耳などの感覚器を通して入ってきた情報を処理し、危険か安全かを見極める、いやなものか好ましいものかを感じ分ける、何ものでありどう扱えばいいのかを瞬時に判断する機能を、認知機能という。つまり、脳という我々一人ひとりに与えられたコンピューターのうち、入力系の情報処理機能である。認知機能不全があると、「わかっていない」「やる気がない」ように見えるが、実は「感じ方が違う」「わかり方が違う」ことも多い。

<LD,ADHDとPDDの診断の重複と、継時的変化>

LD,ADHDやPDDの診断名は、ひとりの子どもに2つまたは3つとも当てはまる場合もある。特徴も、診断基準すべてを満たすほどではなく、いくつかその特徴があるという軽い傾向までさまざまであり、さらに以下のような特徴もわかってきた。

① PDD の子どもの対人関係の発達は、発達年齢より数年あとに、非常に強く出てくる。

幼児期には人見知りもなく、ひとり遊びに夢中だった子どもが、幼児期後半から急にお母さんにべたべたする。すぐに担任の先生のそばに来て、大好きな虫の話ばかりしている。学校に来たお客さんに大きな声であいさつし、「どこから来たのですか？何の用ですか？」など恥ずかしがらずに話しかけたりするので、定義と反対に、「社会的関係の形成が良好」と間違えられることも少なくない。困難というよりは、年齢より幼いと理解するのがより適切である。

② PDD と ADHD が重複している子どもは診断名が変りやすい。

幼児期には多動が目立つのでADHDと診断され、小学校高学年くらいになり動きが落ち着いてきてはじめてPDDの特徴が見えてくることが多い。またLDについては、学童期に入らないと診断は難しい。過去の診断名にこだわらず、手立てはその時期に当てはまるそれぞれの特徴に応じて立てる必要がある。

③リタリンを服用している子どもの状態把握と効果判定

リタリンは、服用後30分くらいから3～4時間効果が持続し、その前後で症状が劇的に変化する。効果のある時間帯には、多動が目立たなくなる代わりに、PDDの特徴に似たこだわりや頑固さが目立つ場合もある。また薬の効果判定には、朝1回だけ飲んでいるのか、朝昼2回なのか、飲み忘れはないか、食欲・睡眠時間の変化などにも注意を払う必要がある。

<医療と教育のよりよい連携を求めて>

医療と教育の連携とについては、当初は役割分担が明確でなく、通常学級での対応が難しいことに対して、学校が手立てを工夫することなく、「教育の問題でなく医療の領域」と解決役ならぬ引導渡し役を押し付けられそうになったことも多々あった。

今少し見えてきたのは、精神医学的診断は、ないよりあったほうがいいが、絶対視すると、手立てを見誤ることもあり、あくまで子どもの実態を優先すべきだということ。

また、薬物療法の効用としては、子ども固有の脳というコンピューターを、学校という一律100ボルトの電源に入れたときに不調が起きる場合、薬という変圧器を使って、電圧電流の調整を図ることは有効であり、それと学校や家庭で行うプログラムの改良との歩調が合えば、より効果が期待できるということ。

子どもたちの笑顔が楽しみで、来年度もまたいろんな学校にお邪魔したいと思う。

親、家族、「育ち」の視点から

京都府宇治児童相談所心理判定員(児童心理司) 大隅 健志

今年度より専門家チームのメンバーの一人となり、たくさんの先生方が現場で奮闘されている様子を直にお聞きすることができました。先生方の日夜ががんばられている姿に脱帽しております。ところで、専門家チームメンバーとしての一年と、普段の相談業務の中から思うことを、児童相談所の心理判定員としての立場からお伝えしたいと思います。現場の先生方の一助になれば幸いです。

<発達障害かどうか？－親のいろいろな思い－>

児童相談所での相談において、「この子は発達障害でしょうか？」「自閉症ですか？」「インターネットのホームページでチェックしたらあてはまるんですが・・・」等の質問が少なくありません。そしてとても熱心に、時には執拗に「検査をして下さい」と言われることがあります。

医学的な診断により、発達障害に関する診断名がつくと少なからずショックを受けられますが、逆に予想通りの診断名がついて、「今まで曖昧でわからなかったけれど、すっきりした」とほっとされることがあります。しかし、ここで忘れてならないのは、**診断がつくことがゴールではなくて、今後の支援の参考である**ということです。

子育ての不安や、子どもへの期待など、いろいろな思いを親御さんはもっておられます。種々雑多な感情が入り交じっている場合があるので、周囲が親御さんの一時期の思いにだけに反応してしまうと、良い結果が得られないことがあります。

<忘れてはいけない視点

－どのような環境(家族)の中で「育ち」をしているか？－>

診断名がつくこと(ラベリング)が時に悪い副産物を招くことがあります。

○親自身の関わりの振り返りがされない

「問題はこの子であって、自分の関わりが悪いのではない」

○責任転嫁 「こういう障害をもつ子のことを先生は全然理解してくれない」

これでは、子どもの正確な見立てがなされず、健全な発達が促進されません。

また、発達障害に対する見方も随分と良い方向に動いてきたという印象をもっているのですが、個の子どもにスポットをあてることに集中して、どのような環境(家族)の中で「育ち」がなされているか、「家族関係」等の視点が見落とされることがあるのです。

今起こっている問題が、どのくらい障害に由来するものか、他方どのくらい家庭の環境や育ちの中で身につけてきたものかということに目を向ける必要があると思います。

例えば、親の愛情を十分に受けられずに育った際に、愛着対象が定まらなかったり、多動やこだわりの様な行為がみられたりする場合があります。目に見える行為だけで、発達障害とは言い切れず、愛着の問題ということも想定されます。**どのような環境(家族)の中で「育ち」をしたか、個体の特徴とどう関連しているか**という視点はとても大切です。このような見定める行為は、アセスメントであり、今後の指針となるものです。それは、親がどのような働きかけを現在しており、次は周りの立場として、どのようなことができるかということを考えることに繋がります。

<親にどう伝えるか？－関係という視点から－>

親がどんな人であるかという視点はとても大切です。このような事例があります。

親の言い分：「この子の障害のことを教師は全然理解してくれない。こういう接し方をしてくれたら良いのに・・・」。

先生の言い分：「親御さんの要望が多すぎる。集団教育の場では限界がある。その中でこちらとしてはこういう関わりをしているのだが・・・」。

学校と親が非難しあっており、板挟みになりそうですが、よく聞いてみると先生はとても努力をされており、それが親に伝わっていないのだということがあります。

親は子どものことを一生懸命に考える余り、こうと思ったらこうとの思いをもつことがあります。これはもったいない。先生の努力は報われず、親の不満が高まるばかりです。

ここで大切なことは、(先生の立場としては) 親にどのように伝えるかという視点です(親の立場であればどのように先生に伝えるかということですが)。いずれにせよ、**先生と親との間で、伝えあおうという姿勢が大切です。**

先生と親のコミュニケーションがうまくいかないパターンとその対応例

①先生は教えるというスタンスで仕事をしているので、そのままの姿勢で親と関わるパターンがあります。うまくいく場合もあるでしょうが、プライドの高い親や受け取る範囲の少ない親には効果的ではないでしょう。双方の隔たりができたままということがおきてしまいます。また、従順な親に対しても教えるという姿勢が効果的ではない場合もあります。先生の言われるままに助言を聞いて、状況かまわず同じ方法を取るということになるかもしれません。

親の意思にも耳を傾け、一緒に取り組むという協調関係の視点が大切でしょう。

②独特の特徴のある親(子どもも同じ傾向かもしれませんが)に対しては関わり方の工夫をしなければなりません。例えば、被害的な意識の強い親には、**現状を正しく理解できるように伝える**ということ(こまめに伝える等)や、口頭で話すだけでは理解してもらいにくい場合は、**視覚的にみられるようにする**等です(個別参観等)。

③あまり情感豊かではない親には、心情に訴えても有効ではありません。心豊かな子に育てるには、情緒的な関わりは大切ですが、それを大義名分に関わると、抵抗のみを示して、今後のやりとりに不信だけが残ることがあります。割り切って、**筋道立てて必要なことを伝えていく中で、時に具体的行為を伝える**ことが良い場合があります(「家では、手を握って買い物に行って」等)。

<まとめ>

親、家族、「育ち」という視点は、発達障害という視点と同様に大切です。親をどう見るか、そして、どう関わるか、そのことが、子どもをどのように伸ばしていくかということにつながっていくと思います。

「自己座標軸」

福知山児童相談所相談判定課長 熊本 敬一

つい先日、朝のぼや一とした感覚の中で新幹線に乗ろうと京都駅で時間待ちのため本屋さんに寄ると、店頭で「人生に座標軸を持つ」というタイトルの本が並べてあり、一瞬、驚きと興奮に目が覚め、気が付いたらその本を買っていた。

私は、子育てや福祉の専門職のキーワードとして「自己座標軸」という言葉を長く使ってきた。人を支援する、子どもを育てる、このような技を業とするとき、必ず「評価」という途轍もなく大きな壁に悩まされ続けてきた。常に「人を評価しようとしている自分とは」何者なのか？自分の中での常識とは、浅学な自己中心な未熟な感情的な途轍もない怪物……。そんな自分が人を評価する。その時口癖のように語られる言葉は「常識」。本当に常識とは人を評価する物差したる物なのか？思いこみと現実の距離、空想と実像の乖離。そんな状況が本当に常識か？研修に研修を重ねた末「自分が一番非常識」であるとの認識。世界の常識は自分の固有の非常識と重ね合わさるもの……。これがたどり着いた結論であった。

そこから導き出された「では、どうすれば良いか？」

一つは、支援計画。一人一人の個別の支援それを6ヶ月～2年の間を区切って支援計画を立てる。この子にとって唯一今必要とされる支援とは？(色々あって、支援する側の理屈、ではなく)誰が見てもその子にどのような支援を働きかけているかが明確になり、支援者・所属集団(管理職含む)の理解と協力が得られる体制づくり。

二つ目、そのためにはできる限りの客観的評価基準の必要性。それが、自己座標軸である。自分が「できること」「知ってること」については他人に対して厳しい。反対に「できないこと」「知らないこと」に対しては人に甘く評価する。

対人関係の専門職として仕事に携わる者は、自分が「できること」「知ってること」については他人に対して限りなく優しく、反対に「できないこと」「知らないこと」に対しては自己に対して厳しく律する。これが、自己座標軸である。

座標軸を持てるように訓練し、理解し、対応できれば自己が他者に対してぶれない評価基準が持てる。

このことが公平・対等な立場で評価ができ、他者攻撃とならない支援のための評価となる。

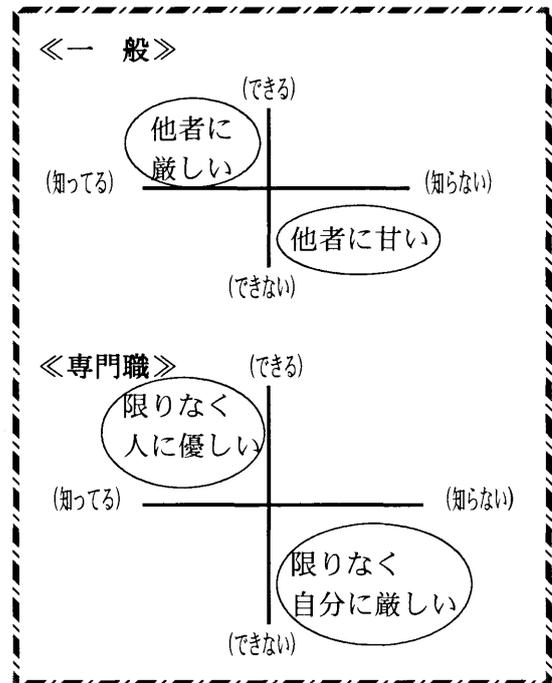
また、関係者会議や評価会議で議論することによって、「あの子どもはどれもやりにくい」「難しい子」「好きになれない」といった初歩的判断ミスにならない専門的評価と具体的支援方法が明確になる。

「一人の子どもを大切にすると」とは、その子の固有の世界の中に存在する夢に向かって実現可能な範囲での日々(日常生活)を支援すること。

色々あっていいのではない。その時間・限られた資源・子どもの要望と現実。支援者のあらゆる可能性を駆使した中で最上の支援は一つである。

それを自分の言葉に自分の価値観を乗せ言語化する。

このような日常(生活)が基本となって教育や治療が有効に作用するものと考えております。



子ども達をともに育ててくださる先生方へ

京都LD親の会たんぼぼ 代表 茶木 敬子

<発達障害の親の会>

LD親の会は1990年6月に設立し、同時期に設立された全国LD親の会に加盟しています。15年以上前から全国各地でLDといわれる子どもたちの親の取り組みが始まっています。

京都府の発達障害の親の会である「日本自閉症協会京都府支部」「京都ADHD親の会クローバー」「ONLY ONEの会ー高機能自閉症・アスペルガー症候群および周辺の発達障害京都親の会ー」「京都LD親の会」の4会は、発達障害のある人が少しでも楽に生きていけるようにと、教育委員会はもちろんのこと労働・福祉などの行政や関係機関などに理解や支援を求めて訪問・懇談・合同講演会など連携して活動しています。2004年12月には4会合同で府議会に「特別支援教育の支援体制の整備・拡充を求める請願書」を提出し、全会一致で採択されました。

私たちは、子どもに関わる多くの方たちが親や本人も含めて幅広く連携をとっていくということを目指しながら、親自身も子ども達の育て方・接し方を学んでいる真最中です。

<親の願い>

保護者は「子どもを理解してほしい」といつも願っています。子どもの良いところも悪いところも、出来るところも出来ないところも、「その子を丸ごと認めてもらいたい」のです。小中学校で経験した「人とのかかわり方」は、親が手取り足取り教えても決して教えきれものではありません。先生一人ではなくクラスのたくさんのお友達や学校全体で理解してもらってこそ、成長するにつれますますます複雑になっていく人間関係や場面理解の基礎となると思います。

発達障害の子どもだけに限らず、本人が困っているということに気づき着目していただき、先生がお手本となって、教室にいる子どもたちと共に接していただけたなら、からかいの対象やひいきとか特別扱いにもならず、自然な形で周りの子どもたちに受け入れられるでしょうし、本人にもかかわり方が吸収しやすいのではないのでしょうか。

自尊心や自己評価を少しでも高めて、「がんばろう、やったらできる」という力をもらい「ここにいてもいいんだ」と思えるようになるのは、やはりお友達や先生からもらえる大変大きな力だと思います。私たちの子どもにとって学校や教室はとても大切な場所なのです。

<自立を目指して>

私たち親が最終目標にしているのは「自立した生活が出来る」ということです。いろんな方の助けをいただきながら、自分で考え、自分で選択して、「自分で決めて生きていく」力を付けることです。「集団」の中の一員としていろんな経験を積み、成長していくためには、作られた「療育の場」ではなく、「教室」が自然で最適だと考えます。そういう教室の雰囲気を見たいです。でも実際には教科の学習も必要なことは確かです。中学生になればなおさら学力の差が開き、自尊心を損ねますし進路の心配も出てきます。お友達と楽しく過ごすために学習が必要ならば「一つの手段として勉強がある」と考えていただき、「自分には特別な教え方をしてもらったほうが良く分かる。みんなと同じところまでいけるようになるかもしれない。自分には必要だ」と子ども自身が感じて納得できれば、通級や個別の指導も受け入れられると思います。

私たち親は、子どもの中の発達障害という困難さを障害ではなく個性となる様に育ててほしいと願っています。自分の出来ない部分を知り、どうしたら出来るようになるかを考え意識して出来る部分を伸ばしていく、そんな力を付けてほしいと願っています。小さい頃から自然に培っていくためにも、教室や学校という場の環境整備に特に力を注いでいただくようお願いしたいのです。

発達障害を持つ子は「言わなくても分かっているでしょ?!」とか「その場を読む」というような当たり前と思われることが通じにくいので、親は子どもの信頼を得るためにその子に合わせ、かなりの努力をすごく長期戦でしなければいけません。相手の勢いに弱かったり、臨機応変ということが分かりにくかったり、また適切な手助けや助言をしていただいてもすぐに結果を出せる子どもたちではないので、親ですら、つい子どもを攻めてしまいます。どうぞ親とともに長期戦を覚悟していただき、行きつ戻りつしながらでも少しずつ育てていく姿を認めてくださるようお願いいたします。

<学校に期待すること>

これまで学年が変わる時や進学、就職など、周りにいる人や場所が変わるたびに本人に関しての引継ぎや情報などが途切れてしまい、今まで積み上げてきた物のほとんどがリセットされてしまうことが度々ありました。校長先生が変わったら学校の取り組みが変わってしまったという事例もあります。私たちのような親子にとってそのリセットがどれほど不安で大変なことかお分かりになっていただけるでしょうか。人や場所が変わっても子どもたちへの支援が繋がればどんなにすばらしいだろうと思わずにられません。

保護者と学校とのつながりはその第一歩であり本人支援への連携の始まりでもあります。そして本人・保護者・学校が同じ目標を共有することが本人の成長にとっても大切だと考えます。そのためにも「個別の教育指導計画」の作成に積極的に取り組んでいただくことをお願いします。目の前の課題をこなすことも大切ですが、本人と親と学校とが同じ目標を見据えていくことが何より大切な手立てだと考えています。また、担任の先生お一人が孤軍奮闘し問題を抱え込むことのないように、学校内外で連携を図っていただき連続した支援をお願いします。

学校という貴重な時間と場所で、一人ひとりが本当に必要とする支援を受けられるよう先生方と親・教育・医療・福祉などの関係者や機関が幅広く柔軟な連携で支え、この先子ども達が学校時代を心から楽しかったと言えることを心から願っています。

各会連絡先

- ・ 社団法人 日本自閉症協会京都府支部 E-mail : askyoto@amber.plala.or.jp
〒602-8143 京都市上京区堀川通り丸太町下る中之町519 京都社会福祉会館2階
Tel : 075-813-5156 Fax : 075-813-5157
- ・ 京都LD親の会「たんぼぼ」 E-mail : keikomor@m19.alpha-net.ne.jp
〒611-1191 京都市洛西郵便局私書箱4号
- ・ 京都ADHD親の会「クローバー」 E-mail : clover-kyoto@maia.eonet.ne.jp
- ・ ONLY ONEの会 一高機能自閉症・アスペルガー症候群及び周辺発達障害 京都親の会一
Fax : 020-4624-7246 E-mail : info@only1-kyoto.net